

中国の看護学生の職業意識

岸 英子¹・松本 麻理¹・荒木 美幸²・孫 莉³

要旨 専門職として教育を受けた看護婦の組織コミットメントや職務コミットメントは高いと報告されている。中国の「独生子」政策後に出生した子供達が看護教育を受ける時代となった。また、少子高齢化社会に入り、看護政策上でも変革期を迎えている中国の一般的な看護学生の職業意識を理解するためにこの調査を行った。

中国南京市の中等衛生学校で看護学を学んでいる女子学生300人（各学年100人）を対象に花田の組織コミットメント調査票を看護学生用に修正して、目標2項目、意欲2項目、残留2項目、安定2項目、功利3項目、計11項目からなる職業意識調査表を作成し学年別、入学決定時期別、卒業後の進路展望別に職業意識調査を行った。併せて、看護や看護婦及び患者のイメージについて調査分析した。

その結果、(1) 看護学生は全体的に高い職業意識を持っていたが、3年生で低下を認めた (2) 看護学校入学の早期決定者は、高い職業意識を持っていた (3) 看護職以外の進路変更を考えている者は功利的な得点が高かった (4) 看護婦や患者に対するイメージは職業意識及び看護学の学習経験と関連していた。

この結果は、日本の調査報告と同様であったが、中国では多くの学生が将来進路転向を考えており、情緒的意識だけでなく功利的な意識を持っていた。

長崎大医療技短大紀 12: 121-126, 1998

Key words : 中国, 看護学生, 職業意識, 看護イメージ, 患者イメージ

はじめに

中国の「独生子」「改革解放」政策は、社会・経済面をはじめ生活全般に影響を及ぼし、看護界も変革期を迎えている。「独生子」政策後に出生した子供達が、中等教育あるいは高等教育を受ける時代になった。看護学生の看護観や職業観も多様化し、「奉仕の精神」から「功利中心」へと変化しつつあると指摘されている。

看護婦（中国では護士・看護師）は専門教育を受け、免許を有する専門職であり、職業意識が高いことは周知の通りである。その職業意識の基盤は看護学生時代に教育を通じて形成助長され、就業後更に強化されていくものと考えられる。職業意識の学年進行に伴う変化、関連要因して進路決定時期、卒業後の進路展望、看護や看護婦のイメージ及び患者に対するイメージとの関連性について検討した。

中国は12億人以上の人口を有し、女性の労働が当然であると社会的に認識され、少子・高齢化社会を迎え看護需給対策、看護体制改革が急がれている。このような社会情勢を反映し、国民医療を支える一般的な看護教育機関（護士教育機関）で、勉学中の看護学生の職業意識に興味を持ち調査研究したので報告する。

研究対象と方法

調査対象者は中国南京市の衛生学校（3年間の護士教

育機関）の女子看護学生300人（各学年100人）に、1997年10月の新学期に質問紙を配布し、無記名自己記載方式で調査しその場で回収し、300人全員から有効回答を得た。統計処理にはSPSSを使用した。

職業意識調査票は花田の組織コミットメント尺度^{1),2)}を基に看護学生用に修正した調査票を用いた。質問項目の内容は表1の通りで、価値観や目標の受け入れ2項目（目標）・積極的意欲2項目（意欲）・好きだから留まりたいという希望2項目（残留）・ここまで来たのだから今後も続けたいという希望2項目（安定）・得るものがあるうちは続けたいという功利的な考え3項目（功利）の11項目を5段階評定として得点化し、学年別職業意識、看護学校への進路決定時期と職業意識、卒業後の進路展

表1. 職業意識調査の主な項目

1. 看護の職業は自分の価値観と一致（目標1）
2. 看護学生同士のもの考え方は受け入れやすい（目標2）
3. 看護職に就いたら看護上必要な残業は進んで行こう（意欲1）
4. 自分の看護の質を高めるため、努力を惜しまない（意欲2）
5. 看護の仕事が好きなので、看護職に就こうと思う（残留1）
6. 職業として、看護職より良い職業はあまりない（残留2）
7. 看護学生としてこれからも勉強を続けたい（安定1）
8. 看護職は安心なので、看護職になろうと思う（安定2）
9. やりがいのない看護職なら、就職しても意味がない（功利1）
10. 看護業務から得るものがあれば、看護職を続ける（功利2）
11. 能力向上の機会が無ければ、職業天候もあろう（功利3）

- 1 長崎大学医療技術短期大学部看護学科
- 2 長崎大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻
- 3 東北大学医療技術短期大学部看護学科, 研究留学生

望と職業意識，看護・看護婦に対するイメージ及び患者に対するイメージを学年別に比較検討した。

研究結果

1. 学年別の職業意識

中国の看護学生の学年別職業意識11項目の得点を表2に、関連項目別に得点をまとめた学年別職業意識を図1に示した。3年生の残留が3.17±1.48、目標が3.27±1.28でやや低い得点であったが、全体的に見ると職業意識は高い水準であり、特に意欲・安定・功利面が高かった。目標と意欲では1年生，2年生，3年生の順であり，残留と功利では2年生，1年生，3年生の順で，安定では2年生，3年生，1年生の順であった。

表2. 中国の看護学生の学年別職業意識

項目	1年生=100人	2年生=100人	3年生=100人
価値観にあう	3.56±1.14	3.47±1.14	3.21±1.20
学生思考容受容	3.20±1.00	3.20±1.07	3.33±1.36
残業進んで	4.10±1.04	4.24±0.99	3.90±1.24
質向上的努力	4.48±0.81	4.27±0.80	4.00±1.21
看護が好き	3.85±1.26	3.87±1.15	3.36±1.37
看護職は良い	3.25±1.26	3.35±1.36	2.97±1.58
看護の勉強継続	4.31±1.00	4.40±0.98	4.20±1.17
看護婦は安心	3.57±1.39	3.83±1.13	3.79±1.23
やりがい	3.95±1.44	3.93±1.38	3.59±1.49
看護職継続	4.25±1.15	4.33±1.07	3.95±1.12
他職種への変更	3.33±1.20	3.53±1.36	3.90±1.20

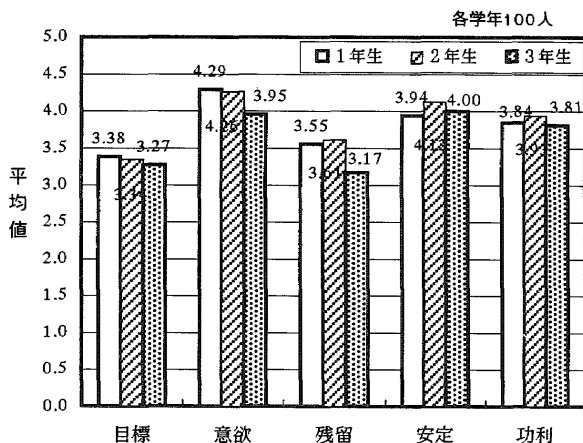


図1. 中国の看護学生の学年別職業意識

1年生と2年生との間には全項目とも有意差を認めなかったが，1年生と3年生との間では，意欲の面で1年生4.29±0.93，3年生3.95±1.23で，1年生が有意(p<0.05)に高く，残留では1年生3.55±1.26，3年生3.17±1.48で，1年生が有意(p<0.05)に高かった。2年生と3年生との間では，意欲が2年生は4.26±0.90，3年生3.95±1.23で，2年生が有意(p<0.05)に高い得点であった。

2. 進路決定時期と職業意識

看護学校への進路決定時期は，看護学生は小学校以前

が12.0%，中学1・2年生15.0%，中学3年生65.7%，中学卒業後7.3%であった。中学1・2年生以前に決定した81人（早期進路決定者）と中学3年生以降に決定（後期進路決定者）した219人の職業意識を図2に示した。後期進路決定者に比較し，早期進路決定者は目標・意欲・残留・安定が高い得点で，後期進路決定者は功利面で4.12±1.27と高得点であった。両群間に有意差が見られたのは残留で，他の項目では認めなかった。看護職への残留を考えている者は，早期進路決定者では3.96±1.11，後期進路決定者は3.26±1.34であり，早期進路決定者の残留に対する職業意識が有意(p<0.001)に高かった。

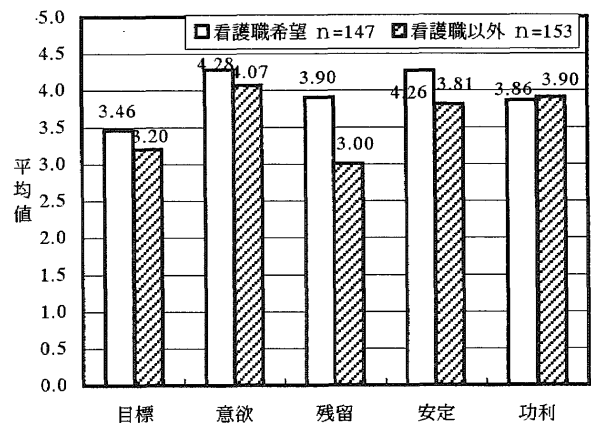


図2. 将来の看護展望と職業意識

3. 卒業後の進路展望と職業意識

中国では看護職（護士・助産士）希望49.0%，進学11.0%，進路変更28.3%，未決定11.7%であった。看護職就業希望者147人と看護職以外の就業希望者153人の職業意識を図3に示した。看護職就業希望者は目標・意欲・残留・安定において高得点で，進路変更や未決定者は功利面がわずかに高い得点であった。両群間で有意差が見られたのは残留と安定であり，看護職就業希望者の残留は3.90±1.21，看護職以外の就業希望者は3.00±1.33で，前者が有意(p<0.001)に高かった。看護職就業希望者の安定は4.26±1.00，看護職以外の就業希望者は3.81±1.25で，前者が有意(p<0.001)に高い得点であった。

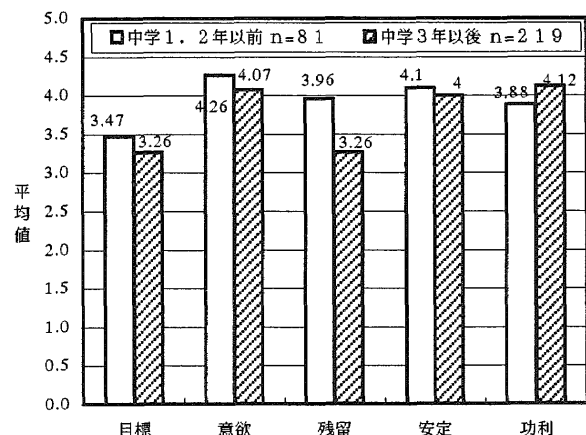


図3. 看護学校への進路選択時期と職業意識

4. 看護及び患者に対するイメージ

4-1. 看護に対するイメージ

看護に対するイメージで平均4点以上の高得点を示したのは、専門的知識、熟練した技術、清潔感、日常生活援助、医師補助者、奉仕の6項目であった。学年別に有意差を認めた項目は、医師の補助者、患者の尊重、厳しい職業の3項目で、医師の補助者として認識しているのは1年生4.88±0.55で、2・3年生に比較し有意(p<0.01)に高得点であった。患者の尊重という項目では学年別に有意差を認め、得点の高いのは1年生、2年生、3年生の順で、看護を厳しいと思っている人は全体的に少なかったが、特に1年生の得点が低かった。

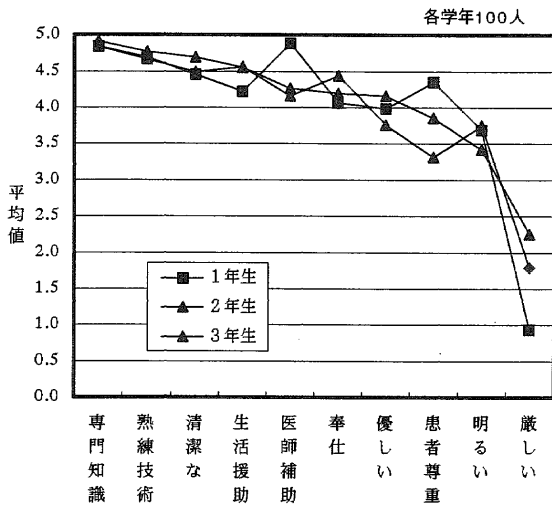


図4. 看護のImage, 学年別比較

4-2. 看護婦に対するイメージ

看護婦に対するイメージで平均4点以上の高い得点を示したのは、身体健康、責任感、判断力であり、看護婦を意地悪であると認識した学生は少なかった。大変な仕事と認識しているのは3年生で、1年生に比較し有意(p<0.05)に高く、天使の様なと認識したのは1・2年

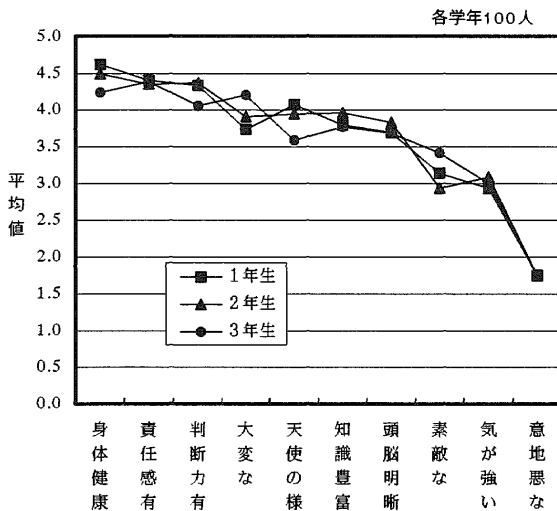


図5. 看護婦のImage, 学年別比較

生で、3年生より有意(p<0.05)に高く、看護婦は素敵であると捉えたのは3年生が2年生より有意(p<0.05)に高い得点であった。

4-3. 患者に対するイメージ

患者に対するイメージで平均4点以上の高い得点を示したのは、苦しうのみであったが、不安そう、身体虚弱、心細そう、寂しうで高い得点を示した。患者に対するイメージでは、各学年別に変動幅が大きく、認識の差が見られた。1年生と2年生との間では心細そうが2年生に有意(p<0.01)に高く、他の項目では顕著な差を認めなかった。1年生と3年生との間では、患者を自己中心的と不潔なイメージで認識した者が3年生に有意(p<0.01)に高く、2年生は中間であった。

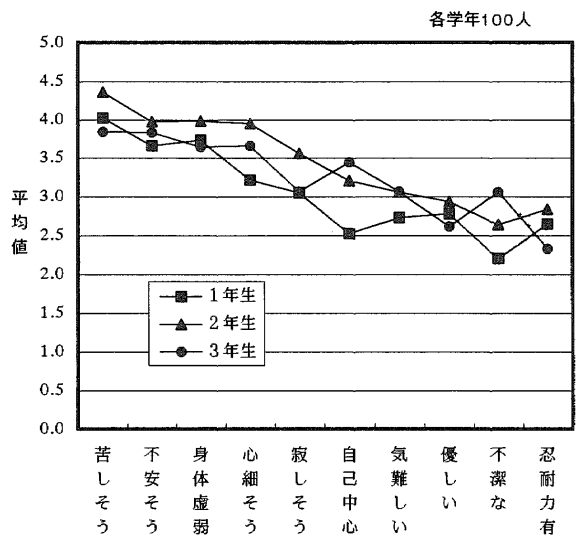


図6. 患者のImage, 学年別比較

考 察

今回の調査から中国の看護学生の職業意識を考えた場合、目標・意欲・残留が情緒的側面に属し、安定と功利は計算的側面と捉えることができる。看護学生の情緒的側面(特に意欲で顕著)は1年生と2年生との間には差を認めず平均得点が高かったが、3年生で低下した。情緒的側面は波多野等の職業的アイデンティティに近い結果であった。³⁾1年生では希望校に入学できたことで高い得点になっており、学年の進行に伴い専門教育の内容(講義・演習・実習等)の理解が深まり、現実の看護業務が見えてくるに従い得点の低下につながったものと思われる。この傾向は日本も中国も同様であった。⁴⁾

Beckerによると、個人が投資したものの大きさ(金・物・時間・努力等)と、辞めることによる不利益を考慮した利害関係によって計算的側面は決定される。⁵⁾今回の研究と照合するならば、中国では安定と功利は学年による有意差を認めず各学年共に高い得点で、情緒的側面にとらわれず途中で辞めることにより不利益が増大することを理解しているためと思われる。安定1のここまできたのだから看護の勉強を継続する、功利1やりがい

なければ職種変更をするでは3年生で低下しており、功利3の能力向上の機会がなければ職種転向もやむをえないでは3年生が高い得点であった。中国でも市場経済導入により、資本主義社会と同様功利的（計算的）な考えが特に若い世代で定着してきており、看護職に対する優遇措置や男女雇用機会均等で、女性の職業が学歴や能力により選択できるため、情緒的側面だけでなく、やりがいや能力向上及び自己実現のため功利的側面が高い得点につながったものと考えられる。

看護学校への進路決定時期との関係では、中国の看護教育制度との関係で中学卒業後中等専門看護学校＝中等衛生学校に入学するため、若い時期に将来の職業を選択することになる。従って、進学前の中学3年生以降で決定した学生が73%に及んだが、後期進路決定者より早期進路決定者の職業継続意識が高かった。有意差を認めなかったが後期進路決定者は、功利面の得点が高かった。早期進路決定者は看護や患者に対する理解等、入学前に動機づけができていたので、功利面を除いて得点が高かったものと思われる。中学3年で決定した学生は卒業後の進路決定に直面して、看護に対する十分な検討がなされず、学業成績の都合で選択した学生もいることを否定できない。

進路展望においても看護職就業希望者は目標・意欲・残留・安定の面で得点が高く、看護職以外の職業希望者は功利面がやや高い得点であった。情緒的側面との関係が明瞭で、職種変更を考えている学生は、看護に対する愛着よりも、やりがいや能力向上を重視している傾向が見られた。中学3年という若い時期に将来の職業を決定することには、迷いが多いものと思われる。また、1993年の「看護婦登録管理法」により看護職員の基本レベルが保証されることになり^{6),7)} 21世紀には中卒看護婦の教育廃止が予定されている。また、中級看護婦（護士）よりも高級看護婦（護師）が多数を占めるようになった。このような社会的背景も看護学生の職種変更に大きく影響しているもの推定される。

看護・看護婦に対するイメージでは4点以上の高得点を示した項目が多く、良好なイメージを持っていた。新入生は看護を専門的知識と技術を持った医師の補助者と捉えており、次いで患者の尊重をあげている。しかし、2・3年生では患者の尊重は低い得点であった。最近の中国では、「患者第一主義」を提唱する病院が広まりつつある。このことが1年生の意識に反映しているものと思われる。

看護や看護婦に対するイメージは看護婦に対する社会的評価、本人または家族の入院や見舞い、死との遭遇等の経験から生命や看護に対するイメージが形成されるものと思われる。なお、今回の調査対象者は学生自身入院経験を持つ者は24.3%で、95%の学生が近親者の入院経験・見舞い経験有りと回答し、近親者の死に遭遇した者が95%に及んでいた。

また、患者に対するイメージでは学年間にバラツキが生じた。自分や近親者の入院経験は患者を第1人称としてみているので、1年生では自己の経験や概念上から捉えており、2年生では講義に加え、臨床実習が入ってくるにより看護の対象者という見方が入ってくる。3年生では臨床実習が多くなり、自己の看護経験から患者に対する好意的な味方と、経験不足から看護の難しさを知り否定的な味方が出てきたものと思われる。

おわりに

中国においても看護婦は専門職として認められており、職業意識が高いことは日本や他の国々と同様である。看護学生の職業意識がどのように形成されるのか学年別、進路決定時期、卒業後の進路展望、看護に対するイメージについて検討した。その結果、以下のようなことがわかった。

1. 中国の看護学生の職業意識は、全体的に平均得点が高く、1年生と2年生の間には有意差をみとめなかったが、目標・意欲・残留面で3年生が低く、安定と功利面では2年生がやや高い得点であった。
2. 看護学校への進路決定時期と職業意識との関係では、早期進路決定者は目標・意欲・残留・安定が共に高く（残留のみ有意差あり）3年生以降の決定者は功利の得点が高かった。
3. 卒業後の進路展望と職業意識との関係では、看護職以外の就業希望者が51%に及んだ。看護職就業希望者は目標・意欲・残留・安定面が共に高く（残留のみ有意差あり）、進路変更希望者は功利面でわずかに高い得点であった。
4. 看護や看護婦に対するイメージは、専門的知識と熟練した技術を持った医師の補助者のイメージが強く、特に1年生で顕著であった。患者尊重では1年生が高い得点で2年生・3年生と続き学年間で有意差を認めた。看護婦に対するイメージでは身体健康で責任感があり、知識が豊富で判断力が有り、大変な仕事をしている白衣の天使のイメージであった。
5. 患者についてのイメージは、苦しそう、不安そう、身体虚弱の項目で平均得点が高かった。又、心細そう、自己中心的、不潔な項目では、学年間で有意差を認めた。

中国の看護教育制度における中等専門看護学校（中等衛生学校）の看護学生の職業意識調査の結果、「1人っ子（独生子）」「改革解放」政策後の若い世代の看護学生の職業意識が、情緒的側面のみでなく、安定と功利的側面で高い得点を示した。早期に看護学校進学を志望した学生、看護職への就業を決めている学生は、看護や看護婦に対して良好なイメージを持っており、職業意識も高かった。一方、自己実現のために看護職にやりがいがないければ職種変更を考えている学生が多いことも興味深い結果であった。

調査に御協力頂いた南京衛生学院教官貨茵先生、白玉華先生、張菊萍先生に深謝申し上げます。

引用文献

- 1) 花田光世：オピニオン・サーベイによる経営人事革新，ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス，No.2-3，p.81-94，1991.
- 2) 石田真知子他：看護婦の組織帰属意識と職業帰属意識，東北心理学研究，No.46，p.40，1996.
- 3) 波多野梗子，小野寺杜紀：看護学生及び看護婦の職業的アイデンティティの変化，日本看護研学会雑誌，No.16，p.21-28，1993.
- 4) 岸 英子，孫 莉，小笠原サキ子：看護学生の職業意識の日中比較，第5回中日看護学術学会集録，p.76-78，中華護理学会，1998.
- 5) Becker.H.S.: Notes on the concept of commitment, American Journal of Sociology, No.66, p.32-40, 1960.
- 6) 曾 熙媛：変革期にある中国の看護の発展，第4回中日護理学術交流会論文集，p 1-8，中華護理学会，1996.
- 7) 袁 曉麗：中国の看護の現状と課題，週間社会保障，No.1778，p.60-63，法研，1994.

The Professional Commitment of The Nursing Students in China

Eiko KISHI¹, Mari MATSUMOTO¹, Miyuki ARAKI² and Son LIE³

- 1 Department of Nursing, The School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University.
- 2 Department of Midwefry, The School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University.
- 3 Chinese Student in Japan, The School of Allied Medical Sciences, Tohoku University.

Abstract The studies reported that professional nurses and nursing students have higher commitment to their profession. We examined the professional commitment of the nursing students to verify this argument in China.

The subjects is 300 female students in the junior nursing school at Nanking, in China.

The questionnaire used a revised professor Hanada's organizational commitment.

The results are: (1) The nursing students have higher commitment to their profession. But, 3rd-year students have a enarvation. (2) The earlier that they decide to become a nurse, have higher professional commitment. (3) The students who think about turnover have lower affective and calculative commitment to their commitment. (4) The affective commitment has the positive relationship with the images of nurse and patient. The nursing students in China have nursing image that is professional knowledge, a special expert and a person of the medical doctor.

The results are the same research reports in Japan. But, a lot of nursing students in China think about turnover, they have calculate commitment to their commitment.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 12: 121-126, 1998